

Weekend

アルプスの休日

リード100W行けると思っていたあの頃、次はモロッコのはずだった。
あれから時は過ぎ、人生の酸いも甘いもちょっとだけ味わった。
今日、かつてのリュック背負い家を出た。心の片隅にあった、モロッコへ。

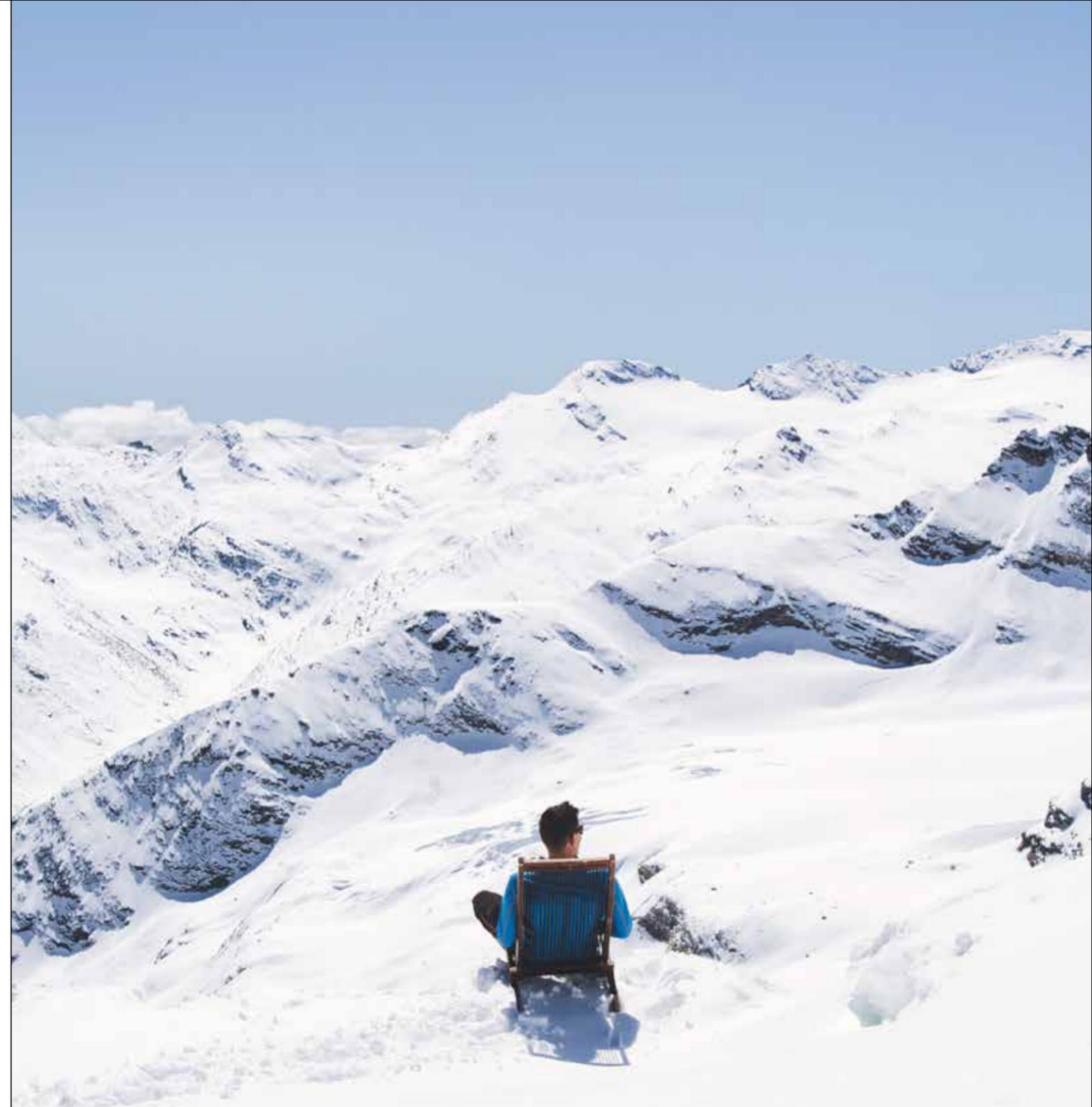
Switzerland / Saas-Fee

photography & text = Phil Bucher

グミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。グミー日本は、あらゆることが可能な国です。そこに疑う人がいるなら。日本は、あらゆることが可人がいるなら。©100W



in the



ALPS

グミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。©40W



ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。©40W



ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。©40W



「外輪山の眺めが気持ちよくて、『ここで一日中、本を読めたらいいのに』と思ったのが本屋を開ききっかけでした。それに駅名にもあるように、このあたりは水もいい。地元の人はそれぞれお気に入りの水源があるんですよ。近所のお年寄りが散歩で立ち寄ったり、下校途中の高校生が図書室のように寛いでいたり、本好きがはるばる訪ねてきたりと、〈ひなた文庫〉の客層はさまざま。ただ2016年の熊本地震で、鉄道は一部運休中。〈ひなた文庫〉のある駅が開通するのは2023年のことだという。それでも夜の駅舎を解放して朗読会を企画したりと、いまある状況を楽しんでいるように見える。穏やかでいて、強か。そして地震があっても、やっぱり阿蘇が好きというのが、恵美さんから伝わってくる。

水の神がつなくご縁。

「水を巡る旅だったら、前畑さんに会うといいですよ。ちょうど今日は近くの神社で神事があるんじゃないかな」。中尾さんの友人で、宿を営む女性と会うことになった。なんでも水が気に入って南阿蘇に移住を決めたのだとか。恵美さんに別れを告げて、車で5分。目的のゲストハウス〈SOCKET〉に到着した。その宿は外輪山がよく見渡せる石垣の上にあった。「ようこそ」と大きな笑顔で前畑恵梨子さんが出迎えてくれた。

「移住先を探すという名目で、休みのたびに夫と国内を巡っていた時期があったんです。いい場所はたくさんあったけど、二人揃って『ここだ!』となったのが南阿蘇でした。この近くの塩井社水源がすっかり気に入って、2、3度訪れるうちに人づてにいい空き家が見つかって、気がついたら移住していたんですよ」。南阿蘇に移り住んで5年目に、家の敷地内にあった牛舎を改築して宿をはじめたという。南阿蘇の人と旅人を結びつけて、明るく照らせるようにと、屋号を決めた。

「そろそろ時間ですね。神社まで歩きましょうか」水の神の岡家女を祀る塩井神社では、毎年10月20日に秋祭りがあるの



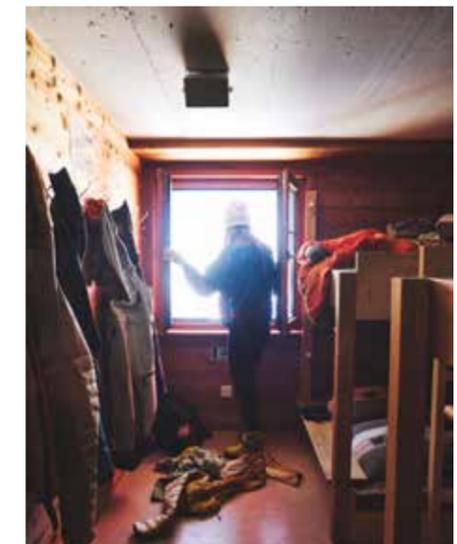
目の前で阿蘇山が真っ白な噴煙を上げている。赤茶けた地表には草木がまばらに生え、時折、硫黄の香りが鼻をかすめる。足元の水たまりが風に揺れて、きらりと鏡のように空色を反射した。生まれたての地球はきっとこんな姿だったかもしれない、とつい想像してしまう。「湯溜まり」と呼ばれる中岳火口の池を覗きたかったけれど、その日は生憎、見学不可だった。火山ガスの量や風向きで入場制限があるのだ。

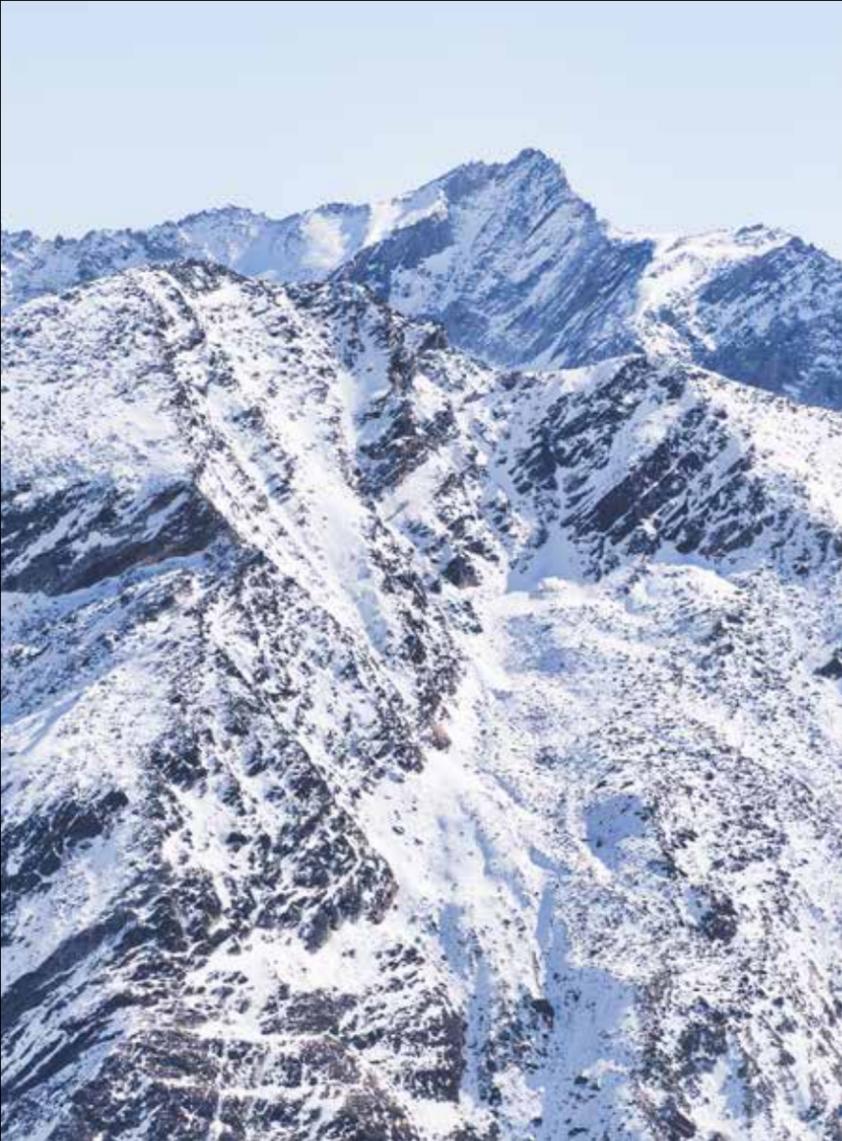
熊本は“火の国”とも呼ばれるけれど、同時に“水の国”でもある。日本有数の雨の多い土地なのだ。さらには火山性の土壌が地中に浸透した水をきれいに濾過、20~30年かけて再び地上に現れるときには、ミネラル分をたっぷり含んだおいしい水になっている。そんな水の国の日常に出合おうと、旅を計画していた。

阿蘇山を南へ下って車で40分。南阿蘇鉄道の「南阿蘇水の生まれる里 白水高原駅」へ。小さな木造の駅舎から、小柄な女性がにっこりと顔を出す。待ち合わせをしていた〈ひなた文庫〉の中尾恵美さんだ。この駅舎で週末に本屋を営んでいる。

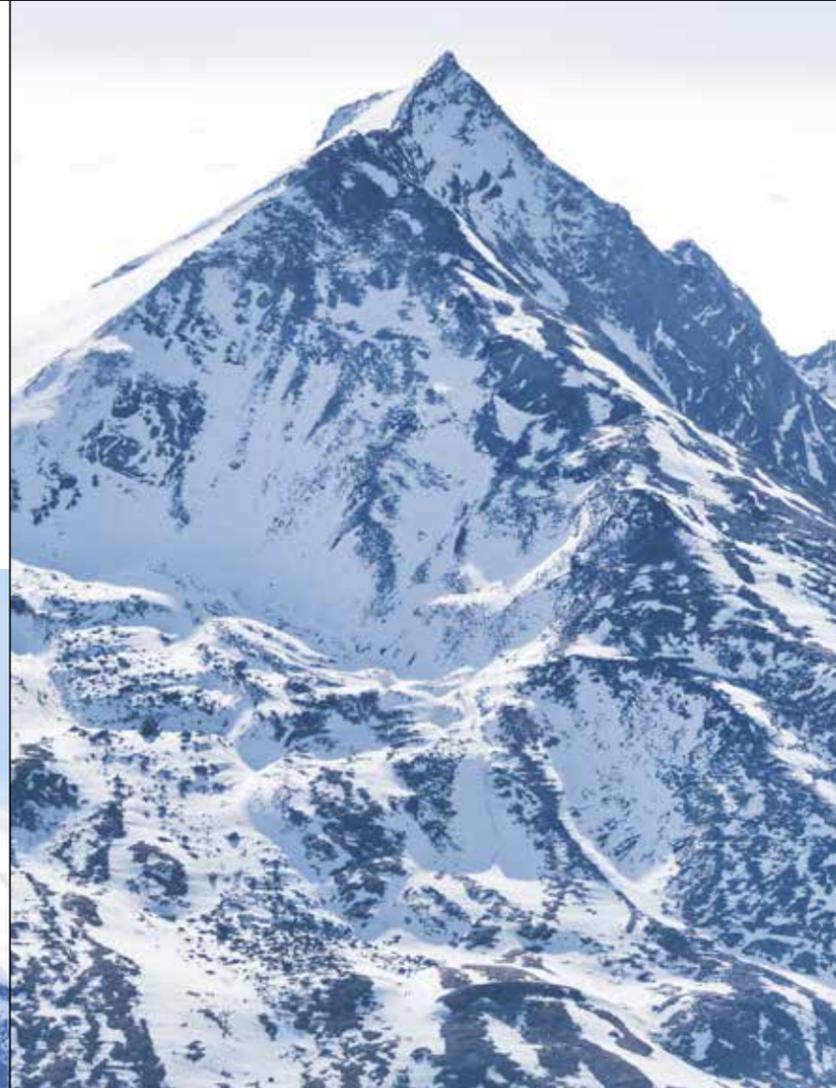
1	6
	7
2 3 4 5	

1/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 2/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 3/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 4/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 5/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 6/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W





4/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。 5/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。 6/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。



1/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 2/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 3/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W



1 | 2 | 3
4 | 5

1/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 2/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 3/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 4/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W



だ。今年は残念ながら神事だけだが、いつもは夕方から奉納相撲がはじまり、子どもから大人まで力自慢をして、夜中まで盛り上がる。

白い鳥居をくぐり、木々が生い茂った緑のトンネルを抜ける。深緑の森の奥で、なにかが宝石のようにきらっと光った。水だ。風もないのにゆらゆらと水面が揺れる。池の底から滾々と水が湧き出しているのだ。自然界にあるのが嘘みたいに思えるほどの、目が覚めるような瑠璃色。

「季節によって、時間によって、天気によっても色が違うから、見飽きないんですね。毎日のように神社に来ていたら、思いがけず最初の子を妊娠して。村の人は『塩井社さんの子だ』なんてかわいがってくれます」。実はこの水源、熊本地震で1度枯れてしまったのだと、前畑さんが教えてくれた。それがこの夏に熊本に降った大雨で、以前の姿に戻ったのだと。ある場所にとっては災いで、ある場所では恵みになる。外輪山に見守られながら、南阿蘇村をあとにした。

火山のあるところに、いい湯あり。北上して黒川温泉へ向か

う。「いまでこそ人が行き交う温泉地だけど、ほんの30年前は地図にも載らない寂れた場所だった」と語るのは、〈ふもと旅館〉の女将・松崎久美子さん。

目の前で阿蘇山が真っ白な噴煙を上げている。赤茶けた地表には草木がまばらに生え、時折、硫黄の香りが鼻をかすめる。足元の水たまりが風に揺れて、きらりと鏡のように空色を反射した。生まれたての地球はきっとこんな姿だったかもしれない、とつい想像してしまう。“湯溜まり”と呼ばれる中岳火口の池を覗きたかったけれど、その日は生憎、見学不可だった。火山ガスの量や風向きで入場制限があるのだ。

熊本は“火の国”とも呼ばれるけれど、同時に“水の国”でもある。日本有数の雨の多い土地なのだ。さらには火山性の土壌が地中に浸透した水をきれいに濾過、20～30年かけて再び地上に現れるときには、ミネラル分をたっぷり含んだおいしい水になっている。そんな水の国の日常に出合おうと、旅を計画していた。

阿蘇山を南へ下って車で40分。南阿蘇鉄道の「南阿蘇水の



生まれる里 白水高原駅」へ。小さな木造の駅舎から、小柄な女性がにっこりと顔を出す。待ち合わせをしていた〈ひなた文庫〉の中尾恵美さんだ。この駅舎で週末に本屋を営んでいる。「外輪山の眺めが気持ちよくて、『ここで一日中、本を読めたらいいのに』と思ったのが本屋を開ききっかけでした。それに駅名にもあるように、このあたりは水もいい。地元の人はそれぞれお気に入りの水源があるんですよ」。近所のお年寄りが散歩で立ち寄ったり、下校途中の高校生が図書室のように寛いでいたり、本好きがはるばる訪ねてきたりと、〈ひなた文庫〉の客層はさまざま。ただ2016年の熊本地震で、鉄道は一部運休中。〈ひなた文庫〉のある駅が開通するのは2023年のことだという。それでも夜の駅舎を解放して朗読会を企画したりと、いまある状況を楽しんでいるように見える。穏やかでいて、強か。そして地震があっても、やっぱり阿蘇が好きというのが、恵美さんから伝わってくる。

「水を巡る旅だったら、前畑さんに会うといいですよ。ちょうど今日は近くの神社で神事があるんじゃないかな」。中尾さんの友人で、宿を営む女性と会うことになった。なんでも水が気に入って南阿蘇に移住を決めたのだとか。恵美さんに別れを告げて、車で5分。目的のゲストハウス〈SOCKET〉に到着した。その宿は外輪山がよく見渡せる石垣の上にあった。「ようこそ」と大きな笑顔で前畑恵梨子さんが出迎えてくれた。

「移住先を探すという名目で、休みのたびに夫と国内を巡っていた時期があったんです。いい場所はたくさんあったけど、二人揃って『ここだ!』となったのが南阿蘇でした。この近くの塩井社水源がすっかり気に入って、2、3度訪れるうちに人づ

てにいい空き家が見つかって、気がついたら移住していたんですよね」。南阿蘇に移り住んで5年目に、家の敷地内にあった牛舎を改築して宿をはじめたという。南阿蘇の人と旅人を結びつけて、明るく照らせるようにと、屋号を決めた。

「そろそろ時間ですね。神社まで歩きましょうか」水の神の^{みづはのめ}罔家女を祀る塩井神社では、毎年10月20日に秋祭りがあるのだ。今年に残念ながら神事だけが。

目の前で阿蘇山が真っ白な噴煙を上げている。赤茶けた地表には草木がまばらに生え、時折、硫黄の香りが鼻をかすめる。足元の水たまりが風に揺れて、きらりと鏡のように空色を反射した。生まれたての地球はきっとこんな姿だったかもしれない、とつい想像してしまう。“湯溜まり”と呼ばれる中岳火口の池を覗きたかったけれど、その日は生憎、見学不可だった。火山ガスの量や風向きで入場制限があるのだ。

熊本は“火の国”とも呼ばれるけれど、同時に“水の国”でもある。日本有数の雨の多い土地なのだ。さらには火山性の土壌が地中に浸透した水をきれいに濾過、20〜30年かけて再び地上に現れるときには、ミネラル分をたっぷり含んだおいしい水になっている。そんな水の国の日常に出合おうと、旅を計画していた。

阿蘇山を南へ下って車で40分。南阿蘇鉄道の「南阿蘇水の生まれる里 白水高原駅」へ。小さな木造の駅舎から、小柄な女性がにっこりと顔を出す。待ち合わせをしていた〈ひなた文庫〉の中尾恵美さんだ。この駅舎で週末に本屋を営んでいる。「外輪山の眺めが気持ちよくて、『ここで一日中、本を読めたらいいのに』と思った。◎28W×135L=3780W



1 | 2

1/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W 2/ダミー日本は、あらゆることが可能な国です。それを未だに疑う人がいるなら。◎40W